

日本文化部会 午前の部

【概要】

馬 場 貴和子*

はじめに

第12回国際日本学コンソーシアム日本文化部会は、2017年12月12日、お茶の水女子大学本館1階103室（生活科学部会議室）において開催された。本部会午前の部では、大学教員1名と大学院生3名による研究発表が「壁をこえる」というテーマのもと行われた。以下、それぞれの発表内容と質疑応答の概要をまとめた。

1. 清水真裕（本学院生）

「貝原益軒における「楽」の領域」

人間の持つ「楽しい」という感情について、特定の領域に限定されたものではなく、より人間にとって普遍なものであるという思想で捉えた貝原益軒の「楽」の領域について考察を行なった。同じく「楽」を普遍的であると位置付けた中江藤樹との違いを明らかにした上で、益軒の「楽」の領域について、「楽」の成り立つ領域を「天地」と想定し、「楽」は人間に生得的に具わっている特性で、自らが主体として気をコントロールすることにより「楽」の条件を整えることができるとした。これら益軒の思想より、主体に「楽しさ」を目指す行動と態度が問われているとした。

質疑応答では生理学や心理学的な考察を行うとどうであるかなどの新たな観点が示された。

2. 董航（本学院生）

「浅井了意の唱導に対する再考察」

近世文学の仮名草子の代表的作者で知られる浅井了意について、国文学的関心ではなく、浄土真宗大谷派に僧籍を持つ仏学者としての側面に注目し、近・現代仏教のつながりと了意の生涯を照らし合わせることによって、宗派を超えた了意の思想の特色を考察した。中国善書を生かした思想である善書思想を了意が目指した理由について、社会的な理由があったのではないかとし、先行研究の内容を加味すると、了意の思想はエンゲイジド・ブッディズムになるとした。

質疑応答では、了意の思想に対する報告者の考えを聞く声が上がった。

3. 平木しおり（ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院）

「徳川綱吉の御成と美術」

徳川五代将軍綱吉の江戸城から大名邸への御成における美術品贈答が武家文化にどのような影響を与えたのか、最も人間関係が反映される行為の一つである贈与に注目し、考察を行なった。御成における贈答は、大名にとっては将軍よりの下賜品を手に入れることができ、将軍にとってより良い名物を吸い上げることでできる行為であった。そのなかでも名物茶道具は側室である御内証同士で贈与が行われ、これは女性同士という奥の贈与によって行うことで、先例化を避けつつも將軍家

*お茶の水女子大学大学院院生

と大名家の関係を築くという綱吉の戦略によるところであるとした。また、反対に將軍と大名でお行われた表の贈与は重要な意味を持っており、特に刀は値段が記載されており商品としての価値が見出されていたとした。

質疑応答では、刀の値段が記された折紙に注目が集まっていた。

会であった。

4. 馬場幸栄（一橋大学教員）

「知られざる科学史のヒロイン：国際緯度観測事業を支えた岩手の少女たち」

まだ女子への教育における差別があった大正時代において、岩手県水沢に置かれた文部省直轄研究機関「緯度観測所」にて高学歴の男性研究者に混じり、「計算係」の女性職員として雇われ、観測所を支えていた小学校・女学校卒業の少女たちについて考察した。初代の頃から所長自ら水沢の学校に赴き、卒業する女学生を職員として採用する募集を行っており、観測所が女学生を求めていることが明らかとなった。また、観測所の所長や研究者のなかには熱心な女子教育を行うなどライフイベントに配慮した者も多くいた。在職期間を考慮しなければ、観測所の全職員中4割ほどの人数がいた女性職員たちは、コンピューターの台頭によって姿を消すこととなる。このような人たちを再評価し、存在を示すことによって「壁をこえる」ことができるのではないかとした。

質疑応答ではその時代の女性の働き方に関する質問があった。

おわりに

以上、日本文化部会における研究発表についてまとめた。時代は近世・近代に集中した発表内容であったが、思想・美術・女性と様々な興味深いテーマの研究内容であった。また、さまざまな観点からの質疑や意見交換が行われ、大変有意義な